

1980年代以降のフランスにおける中等教育の民主化 と教育不平等：庶民階層と移民にみる進路決定要因 に着目して

園山，大祐

<https://hdl.handle.net/2324/1959192>

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（教育学），論文博士
バージョン：
権利関係：

氏名	園山大祐			
論文名	1980年代以降のフランスにおける中等教育の民主化と教育不平等 —庶民階層と移民にみる進路決定要因に着目して—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	竹熊尚夫
	副査	九州大学	教授	吉本圭一
	副査	九州大学	教授	坂元一光
	副査	九州大学	教授	高野和良
	副査	中央大学	教授	池田賢市

論文審査の結果の要旨

本論文は、フランスの中等教育段階での高校への進路決定の際に見られる庶民階層と移民の学業達成の結果の違いに焦点をあて、進路決定過程における教師、進路指導専門員、保護者にみられる意図しない指導の実相に着目することで、教育不平等の構造を掘り下げ、その要因を明らかにしたものである。

本論文ではまず、政府調査統計報告書を初めとした膨大かつ網羅的な教育実態調査データと多様な先行研究への丹念な整理分析を基盤として、高校入試のないフランスの中学校において、単線化に向けた政策とその諸側面への影響を分析している。この中で、職業階層別の学校に代わり同一中学校内の課程別トラッキングが制度化されたことによって、学校内部における排除構造が形成された点を明らかにし、次いでこの構造において、低学力層のための特別な教育課程や古典・外国語の選択科目を通じて、学校の文化資本がエリート養成を維持する進路形成装置の重要な指標となることで、それらを十分に持たない庶民階層と移民には、学業達成に基づかない不平等な結果を生じさせていることを明らかにした。こうした知見は度重なる現地でのフィールド調査を通しても検証され、学校文化に充分通じていない庶民階層と移民の生徒及び保護者側において、そして教師側にも進路決定過程でのリスク回避の奨励という指導を生じさせているというミクロな実態を描き出すに到っている。

以上、本論文は学区制、学校種別選択、補償教育政策など多面的な視点からそれらを総合的に捉えることで、民主的でありかつ、生徒の自主的な進路選択を可能にすることを旨とした各種政策が中等教育の大衆化を進展させる一方で、庶民階層や移民にとってはメインストリームからの自己回避を生じさせているという矛盾的状况を生み出したことを詳細に検証したものである。社会階層やエスニシティ、ジェンダーで不利な状況にある生徒一人ひとりの自律性をいかにして進路指導の過程の中で育むべきか、本論文はフランス教育研究を通して重要な教育学的課題と知見を提供し、学術的貢献をなすものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位に値するものと認める。